

2022年度 京都芸術デザイン専門学校 学校関係者評価報告書

1. 学校評価の目的と評価について

学校評価とは、学生が質の高いより良い教育活動を享受できるように、学校が学校としての目標や取組等の達成状況を明らかにして、その結果をもとに学校運営の改善を図るために行うものである。

学校関係者評価とは、学校が行った自己評価の結果等について、企業を中心とした学校に関係の深い方々（保護者・卒業生等）に評価いただくことを基本とするもので、学校が学校だけでは気づき得ないことに気づき、結果として自己評価そのものの質を高め、次への改善につなげる活動である。学校関係者と教職員等との“対話”と“気づき”を通して、学校関係者評価を行う。

学校関係者は、具体的には次の4つの視点で評価を行う。

- ① 学校経営の改革方針の内容が適切かどうか。
- ② 普通の学校の取組が「目指す学校像」を実現するためのものになっているかどうか。
- ③ 学校の自己評価が適切に行われているかどうか。
- ④ 自己評価の結果を踏まえた今後の改善方策が適切かどうか。

「2021年度 自己評価報告書」を各委員に送付し、評価項目ごとに1（不適切）2（やや不適切）3（ほぼ適切）4（適切）の評価判定を受けた。

2. 2022年度学校関係者評価委員会 実施概要

◇実施日時：2022年9月6日（火）15：30～17：00

◇実施場所：京都芸術デザイン専門学校

- (1) 開会
- (2) 委員紹介
- (3) 学校関係者評価委員会の目的
- (4) 2021年度報告
- (5) 委員長の選任
- (6) 学校の現状と今後
- (7) 協議・意見交換
- (8) その他
- (9) 閉会

3. 出席者

学校関係者評価委員（敬称略、五十音順）		
株式会社イルカ	代表取締役	岩崎 拓矢 様
株式会社 MUJI HOUSE	取締役	川内 浩司 様
有限会社コイズミデザインファクトリー	代表取締役	小泉 達治 様
株式会社コトノスタイル	代表取締役	真壁 斉 様
学校事務局		
京都芸術デザイン専門学校	副校長（委員長）	実成 尚子
京都芸術デザイン専門学校	事務局長	荒起 北斗
京都芸術デザイン専門学校	社会連携教育委員会 委員長代理	富永 良子
京都芸術デザイン専門学校	教学課長	中村 三友紀
京都芸術デザイン専門学校	教学課	大須賀 美穂

4. 評価委員からの評価

評価項目に対する学校関係者の評価は下記の通り。

（1）教育理念・目的・育成人材

評価項目	自己評価	学校関係者評価
理念・目的・育成人材像は定められているか	4	4
学校の特色は何か	4	4
社会のニーズを踏まえた学校の将来構想を抱いているか	4	4
教育目標・育成人材像は、業界のニーズに向けて方向づけられているか	4	4

（2）学校運営

評価項目	自己評価	学校関係者評価
目的に沿った運営方針が定められているか	4	4
運営方針に沿った事業計画が定められているか	4	4
運営組織や意思決定機能は、効果的なものになっているか	4	4
人事・給与に関する規程や制度は整備されているか	4	4
情報システム化等による業務の効率化が図られているか	4	4

(3) 教育活動

評価項目	自己評価	学校関係者評価
教育理念に沿った教育課程の編成・実施方針が策定されているか	4	4
教育目標・育成人材像は、業界のニーズに向けて正しく方向づけられているか	4	4
カリキュラムは体系的に編成されているか	4	4
キャリア教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法などが実施されているか	4	4
関連分野における実践的な職業教育（産学連携授業、インターンシップ、実技実習等）が体系的に位置づけられているか	4	4
授業評価の実施・評価体制はあるか	4	4
成績評価・単位認定の基準は明確になっているか	4	4
資格取得等に関する指導体制は体系的に位置づけられているか	3	3
人材育成目標の達成に向けての要件を備えた教員を確保しているか	4	4
教員の指導力育成、職員の能力開発など、教職員の資質向上のための研修等が行われているか	4	4

(4) 学修成果

評価項目	自己評価	学校関係者評価
就職率の向上が図られているか	4	4
資格取得率の向上が図られているか	3	3
退学率の低減が図られているか	4	4
卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	3	3

(5) 学生支援

評価項目	自己評価	学校関係者評価
進路・就職に関する支援体制は整備されているか	4	4
学生相談に関する体制は整備されているか	4	4
学生に対する経済的な支援体制は整備されているか	4	4
学生の健康管理を担う組織体制はあるか	4	4
課外活動に対する支援体制は整備されているか	3	3
学生の生活環境への支援はあるか	4	4
保護者と適切に連携しているか	4	4
卒業生への支援体制はあるか	3	3

(6) 教育環境

評価項目	自己評価	学校関係者評価
施設・設備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか	3	3
学外実習、インターンシップ、海外研修等について十分な教育体制を整備しているか	4	4
防災に対する体制は整備されているか	4	4

(7) 学生の受け入れ募集

評価項目	自己評価	学校関係者評価
学生募集活動は、適正に行われているか	4	4
学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	4	4
入学選考は、適正かつ公平な基準に基づき行われているか	4	4

(8) 財務

評価項目	自己評価	学校関係者評価
中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	4	4
予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4	4
財務について会計監査が適切に行われているか	4	4
財務情報公開の体制整備はできているか	4	4

(9) 法令等の遵守

評価項目	自己評価	学校関係者評価
法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	4	4
個人情報に関し、その保護の為に対策がとられているか	4	4
自己評価の実施と問題点の改善を行っているか	4	4
自己評価結果を公開しているか	4	4

(10) 社会貢献・地域貢献

評価項目	自己評価	学校関係者評価
学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	3	3
地域に対する公開講座・教育訓練（公共職業訓練等を含む）受託等を積極的に実施しているか	4	4

(11) 国際交流

評価項目	自己評価	学校関係者評価
留学生の受け入れ・派遣について戦略を持って行っているか	3	3
留学生の受け入れ・派遣、在籍管理等において適切な手続き等がとられているか	4	4
留学生の学習・生活指導等について学内に適切な体制が整備されているか	3	3
学修成果が国内外で評価される取り組みを行っているか	3	3

5. 協議・意見交換

下記2点について委員との協議及び意見交換を行った。

(1) 地場をフィールドとした今後の社会連携のありかたについて

- ・京都は国内でも注目される地域であり、地域創生の旗印になり得るのではないかと。また観光分野で新しい取り組みを考えている企業もあり、大学や専門学校などと連携していく機会が今後増えるのではないかと。
- ・学園祭やオープンキャンパスということではなく、京都を訪れた時に一度は行ってみたいと思うようなキャンパスにする。キャンパスをアート化し、訪れた人がグラフィックスやVRを体験できるなど学生主体でできたらよいのではないかと。
- ・学生ならではの発想やパワーで、新しい試みがどんどん出てくると良いと思う。京都は保守的な面が強く、ビジネスを生み出すというのは正直難しいところがある。学生の力でそこを打破してほしいと思う。
- ・京都の伝統産業をどのように発信できるのか。デジタルという流れから学生をアナログに引き戻してモノづくりの本質などを考え、どのような発信ができるか。海外からの需要を引き戻すなどの軸になるのが、本校の役目になっていけばよいのではと思う。

(2) 京都を題材としてどのような取り組みが学生にとって有効な学びとなるか

- ・地元の人たちと一緒にコラボレーションや何か企画ができると面白い。インバウンドも難しいと言われている時代の中で、バーチャルでネット配信を使ってできることもあると思う。バーチャル空間でキャラクターを使って表現することが、例えばゆるキャラのように新しいコンテンツを生み出し、それが今の学生のニーズに合うのではないかと。
- ・京都の伝統産業は高齢化が進んでいる。観光業界でも新しい改革は起こっていない。そういった面を学生の視点で、例えばメタバースを活用するとか、ハタチ前後の学生が考える京都の街を世界に発信すれば面白いのではないかと。
- ・デジタル化が促進し、バーチャル空間の開発が進む時代だからこそ、公共団体や寺社仏閣と連携し、リアルな現場を拠

点としたイベントを見直してみるのはいかがでしょうか。多くの企業と連携をしている学校だからこそそのことができるのではないか。

6.総評

上記11項目の自己評価について、委員の皆様にご承認をいただいた。効果的なハイブリッド授業の強化を図るため、2021年度は非常勤教員とともに指導課題の改善に取り組んできた。2022年は「実践型人材を育成する社会連携教育の深化と拡充」のもと、キャリア授業や専門授業の有効性を検証および「デザイン思考の実践を目的とした企業連携体制の再編成」を掲げ、企業研究につながる研修プログラムの開発や学習成果を適切に評価できる評価指標の再設定などに取り組んでいる。委員の方よりいただいた意見をもとにVRやグラフィックスなどのデジタルとものづくりのアナログという2つの手法での社会連携や観光や伝統文化について学生の感性と学んだ技術を生かし、地域活性化や問題解決に向けた取り組みを検討する。